論文

親から受けた愛情の認識と
女子短大生の結婚・出産に対する意識との関連

権田 あずさ[1)]

キーワード：親子関係，愛情，結婚観，青年期女子，自己肯定感

要　旨

【目的】本研究の第１の目的は，女子短大生が現在まで親とどのように関わり，親からの愛情をどう認識しているかを明らかにすることである。また，そのことが，女子短大生の結婚や出産に対する考え方と関連があるかについて検証することを第２の目的とした。

【方法】A 短期大学の女子学生（１年生と２年生）に質問紙調査（無記名自記式）を実施した。

【結果】①学生と親との日常的な関わりは，学生が低年齢の時期に最も多く，年齢が上がるにつれて少なくなった。②学生は，幼児期から現在まで父親よりも母親と日常的に関わることが多かったと認識していた。③学生は，「意見や考え方を尊重してくれる」ことで両親からの愛情を感じていた。④母親との日常的な関わりが多かった学生は，様々な形で母親から愛情を感じてきたと認識していた。⑤親から愛されていると感じている学生は，結婚や出産を主体的に考えていたのに対し，そうではない学生は，客観的な指標によって結婚や出産を考えていたことが明らかとなった。

１．はじめに

人の一生のうち，青年期は，時間的展望の確立期とされ，自己の人生に対して時間的な視野が広がる時期である。私たちは，将来のことを考えたり，過去のことを思い出したりしながら行動しているが，この働きを捉えるのが時間的展望である（白井，2018）。つまり，青年期は，現在を見つめ，過去を振り返り，未来を展望する中で，「結婚」というライフイベントについても考え始め，それに向けて準備を始める時期である。

我が国における平均初婚年齢は，男性と女性ともに上昇を続け，晩婚化が進行している。それに伴い，女性が子どもを産む年齢も上昇し，晩産化も深刻である。加えて，1970 年における 50 歳時点での未婚割合は，男性で 1.7%，女性で 3.3%であったのに対し，2015 年では男性で 23.4%，女性で 14.1%と，それぞれ上昇し続けている（総務省，2015）。核家族化も進行し，地域との関わりが希薄化している我が国の子育て環境において，将来結婚

１）山陽学園短期大学幼児教育学科

し，新たに自分の家族や家庭を作っていこうとする世代にとって，生まれ育った定位家族の影響は大きい。とりわけ，現代は少子化に伴ってきょうだい数が減少し，ひとりっ子の割合も上昇していることから，定位家族の中でも特に親をモデルとして結婚について考える場合が多いと考えられる。石野・清水（2010）が大学生に行った調査でも，結婚について参考にしていることとして，男女とも「きょうだい」や「過去の家族の記憶」よりも「過去の両親の記憶」という回答が多かったと報告されている。このほかにも，母親の就労形態と子ども（大学生）の結婚観との関連を見た研究（綿引・横道, 1998）や，夫婦関係と子ども（大学生）の結婚観との関連を見た研究（斉藤, 2012；下坂, 2018），シングルマザーとその子ども（中高生）の結婚観との関連を見た研究（小平・末盛・鈴木, 2017），親とのコミュニケーションと子ども（大学生）の結婚観との関連を見た研究（小野寺, 1984；岩槻, 2003；今川, 2017）など，親の姿や親同士の関係，親とのコミュニケーションと青年の結婚観との関連が検討されてきた。しかし，青年期に至る現在まで，親からの愛情をどのように認識してきたかということと，青年の結婚や出産への意識との関連について検証した研究は見られない。

そこで，本研究の第１の目的は，女子短大生が現在まで親とどのように関わり，親からの愛情をどう認識しているかを明らかにすることである。また，そのことが，女子短大生の結婚や出産に対する考え方と関連があるかについて検証することを第２の目的とした。

２．方法

２−１　調査対象

本研究の調査対象者は，A 短期大学に所属する女子学生 106 名（１年生 56 名，２年生 50 名）であった。有効回収数は 84，有効回収率 79.2%であった。

２−２　研究手続き

授業及び休憩時間を利用して，質問紙調査（無記名自記式）を実施した。調査に際して，「プライバシーの保護」，「協力辞退の機会の保障」など，倫理的配慮について口頭及び書面にて説明したのち，その場での回答を求めた。なお，父親や母親と離別，死別している場合は，父親や母親と関わりがあった時点までのことについて回答するよう依頼した。

２−３　調査時期

調査用紙の配布および回収は平成 30 年 12 月～平成 31 年１月に行われた。

２−４　調査内容

質問紙は大きく４つの質問から構成されている。質問１は，調査対象者の親との居住状況，親の勤務形態，調査対象者のきょうだい数およびきょうだい構成についての質問項目（４項目）であった。質問２は，幼児期から現在までの親との日常的な関わりについての質問項目（10 項目）であり，権田・今川（2012）を参考に作成した。質問３は，調査対象者が，幼児期から現在まで，親からの愛情をどのように認識しているかを問う質問項目（５項目）であり，一部，水本（2018）を参考にした。質問４は，結婚や出産，子育てに関す

る質問項目（15 項目）であった。この質問群は,「第 15 回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査)」(厚生労働省, 2015）および「結婚・家族形成に関する意識調査」(内閣府, 2014a）の調査項目を参考に作成した。

２−５　分析方法

幼児期から現在までの調査対象者と親との日常的な関わりを明らかにするため，質問２の 10 項目について４件法ないし５件法で得られた回答を得点化し，関わり得点とした。

また，親との関わり得点と，親からの愛情をどのように認識しているかとの関連をみるために，質問３についても４件法ないし５件法で得られた回答を得点化し，愛情認識得点とした。

親からの愛情をどのように認識しているかが，調査対象者の将来の結婚や出産への意識に関連があるかどうかを検証するために，愛情認識得点が平均点以上であった回答者を愛情認識得点高群，平均点以下の回答者を愛情認識得点低群とし，$\chi 2$ 検定にて検証した。

３．結果および考察

３−１　回答者とその家族のプロフィール

（１）回答者と父母との同居・別居状況

現在，両親と同居している学生は 65.5%，父親と同居しているが母親とは別居している学生は 2.4%，母親と同居しているが父親とは別居している学生は 15.5%，寮または下宿している学生は 13.1%，その他・不明は 3.6%であった。

（２）回答者の父母の勤務状況

回答者の幼少期から現在までの両親の勤務状況を表１に示す。父親はどの時期においても，フルタイム職員であったものの割合が最も高く，７割を超えていた。また，勤務状況がパート・アルバイトや，無職・家事であった父親はほぼいなかった。一方，母親は，どの時期においてもパート・アルバイトの割合が最も高く，次いでフルタイム職員の割合が高かった。無職・家事の母親の割合は，回答者が幼児期〜小学校低学年の時期に最も高かったが，回答者の年齢が高くなるにつれてその割合は低下した。一方で，パート・アルバイトの母親の割合は，回答者の年齢が高くなるに連れて増加した。

表１　回答者の年齢別に見た両親の勤務状況（%）

	父　親					母　親				
項　目	幼児期〜小学校低学年	小学校高学年	中学校	高校	現在	幼児期〜小学校低学年	小学校高学年	中学校	高校	現在
フルタイム職員	71.4	73.8	73.8	71.4	70.2	29.8	31.0	26.2	23.8	21.4
パート，アルバイト	0	0	0	0	1.2	32.1	33.3	41.7	47.6	51.2
派遣，契約職員	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	4.8	7.1	8.3	9.5	8.3
自営	9.5	8.3	8.3	10.7	9.5	2.4	3.6	3.6	3.6	3.6
無職，家事	0	0	0	0	1.2	22.6	17.9	14.3	9.5	8.3
不明	10.7	9.5	9.5	9.5	9.5	8.3	7.1	6.0	6.0	7.1

（３）回答者のきょうだい構成と出生順

回答者うち，きょうだい数が３人である学生の割合が最も高く（47.6%），次いで，きょうだい数が２人である学生の割合が高かった（32.1%）。第 15 回出生動向基本調査（2015）によると，子どもを２人もつ夫婦が最も多く（54.1%），子どもを３人もつ夫婦は 17.8%であったことから，本調査における回答者は，きょうだい数が多いと言える。また，回答者のうち，長子は 38.1%，中間子は 25.0%，末子は 27.4%，一人っ子は 9.5%であり，長子の学生の割合が最も高かった。

３−２　幼児期から現在までの親との日常的な関わり

（１）時期別にみた日常的な関わり

幼児期から現在に至るまで，回答者とその両親とが日常的にどのように関わってきたのかを知るため，５件法で得られた回答については５点を満点として得点を与え，関わり得点とした。４件法によって回答を求めた項目については５点満点に換算した。父親と母親の関わり得点の時期別の平均点を表２に示す。父親と母親のいずれにおいても，すべての項目で，幼児期〜小学校低学年の関わり得点の平均点が最も高く，子どもの年齢が上がるにつれて得点は低くなった。回答者と母親との「会話」得点も子どもの加齢に伴って低下したものの，他項目に比べて平均点が極めて高かった。

表２　時期別にみた父母の関わり得点の平均点（点）

項　目	父親					母親				
	幼児期〜小学校低学年 (SD)	小学校高学年 (SD)	中学校 (SD)	高校 (SD)	現在 (SD)	幼児期〜小学校低学年 (SD)	小学校高学年 (SD)	中学校 (SD)	高校 (SD)	現在 (SD)
（1）一緒に朝食を食べた（食べている）	2.79 (1.48)	2.71 (1.52)	2.36 (1.36)	2.07 (1.33)	1.47 (1.00)	3.43 (1.56)	3.26 (1.64)	2.85 (1.54)	2.29 (1.52)	1.78 (1.28)
（2）一緒に夕食を食べた（食べている）	3.79 (1.30)	3.77 (1.37)	3.57 (1.41)	2.95 (1.39)	2.23 (1.31)	4.46 (0.84)	4.35 (0.98)	4.10 (1.18)	3.56 (1.29)	2.72 (1.44)
（3）一緒にお風呂に入った（入っている）	2.65 (1.40)	1.55 (1.15)	1.03 (0.23)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	3.46 (1.26)	2.28 (1.46)	1.51 (1.04)	1.19 (0.73)	1.14 (0.59)
（4）絵本や本の読み聞かせをしてもらった	2.12 (1.21)	1.52 (0.72)	- -	- -	- -	3.44 (1.19)	1.95 (0.97)	- -	- -	- -
（5）寝かしつけをしてもらった	2.72 (1.31)	1.68 (0.96)	- -	- -	- -	3.80 (1.14)	2.16 (1.27)	- -	- -	- -
（6）学校行事に参加してくれた（くれる）	4.15 (1.24)	3.89 (1.43)	3.09 (1.61)	2.71 (1.62)	2.26 (1.52)	4.77 (0.68)	4.68 (0.81)	4.33 (1.04)	3.87 (1.45)	2.98 (1.71)
（7）家の中で一緒に遊んだ（遊ぶ）	3.54 (1.19)	2.96 (1.33)	1.97 (1.13)	1.60 (0.91)	1.53 (0.89)	3.94 (1.22)	3.44 (1.30)	2.31 (1.36)	2.01 (1.25)	1.83 (1.24)
（8）一緒に外出した（する）	3.61 (1.24)	3.35 (1.21)	2.81 (1.12)	2.54 (1.10)	2.35 (1.11)	4.19 (1.00)	4.12 (0.98)	3.67 (1.07)	3.51 (1.10)	3.35 (1.20)
（9）会話をした（する）	4.53 (0.76)	4.27 (0.97)	3.70 (1.11)	3.54 (1.22)	3.52 (1.25)	4.89 (0.49)	4.88 (0.42)	4.76 (0.57)	4.70 (0.61)	4.57 (0.82)
（10）一緒にテレビを観た（観る）	4.39 (0.94)	4.17 (1.17)	3.72 (1.27)	3.33 (1.34)	3.25 (1.36)	4.72 (0.74)	4.65 (0.79)	4.36 (1.01)	4.05 (1.19)	3.83 (1.27)

（２）父親・母親別にみた日常的な関わり

子どもへの日常的な関わりが，父親と母親で異なるのかを調べるため，質問２の調査項目ごとに父親と母親のいずれにおいても欠損のない回答者のデータを抽出し，対応のある t 検定により検証を行った。その結果を表３に示す。

表より，多くの項目で，父親よりも母親の関わり得点が高かった。特に，子どもが幼児期〜小学生という低年齢の時期に，父親と母親の関わり得点の差が大きかった。

「一緒に朝食を食べた（食べている）」という項目では，幼児期〜小学校低学年，小学校

表３　日常的な関わり得点の父母比較（点）

項　目	幼児期～小学校低学年							小学校高学年						
	父親			母親				父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）一緒に朝食を食べた（食べている）	78	2.79	2.19	78	3.40	2.45	-3.81***	75	2.71	2.26	75	3.23	2.69	-2.93**
（2）一緒に夕食を食べた（食べている）	76	3.79	1.72	76	4.43	0.73	-4.83	75	3.80	1.79	75	4.37	0.85	-4.22
（3）一緒にお風呂に入った（入っている）	75	2.68	1.98	75	3.48	1.47	-3.91***	75	1.52	1.20	75	2.23	1.96	-4.49
（4）絵本や本の読み聞かせをしてもらった	76	1.71	0.96	76	2.79	0.92	-9.25	75	1.16	0.14	75	1.55	0.60	-4.57
（5）寝かしつけをしてもらった	76	2.19	1.11	76	3.05	0.84	-6.51	76	1.26	0.38	76	1.71	1.04	-4.74
（6）学校行事に参加してくれた（くれる）	77	3.30	1.00	77	3.81	0.32	-5.03	75	3.08	1.29	75	3.77	0.34	-5.33
（7）家の中で一緒に遊んだ（遊ぶ）	76	3.53	1.43	76	3.93	1.42	-2.99***	75	3.01	1.77	75	3.41	1.62	-2.74**
（8）一緒に外出した（する）	76	3.62	1.55	76	4.18	1.03	-5.31	75	3.39	1.46	75	4.12	1.00	-5.80
（9）会話をした（する）	77	3.64	0.37	77	3.92	0.15	-4.49	76	3.47	0.52	76	3.89	0.12	-5.57
（10）一緒にテレビを観た（観る）	76	3.51	0.57	76	3.78	0.36	-3.19***	75	3.39	0.75	75	3.72	0.39	-3.36**

項　目	中学校							高校						
	父親			母親				父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）一緒に朝食を食べた（食べている）	73	2.30	1.71	73	2.78	2.28	-3.34**	73	2.11	1.93	73	2.30	2.30	-1.84
（2）一緒に夕食を食べた（食べている）	74	3.57	1.92	74	4.08	1.34	-3.69***	73	3.03	2.00	73	3.62	1.52	-4.37
（3）一緒にお風呂に入った（入っている）	75	1.03	0.05	75	1.47	0.95	-3.75***	74	1.00	0.00	74	1.19	0.57	-2.16*
（4）絵本や本の読み聞かせをしてもらった	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
（5）寝かしつけをしてもらった	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
（6）学校行事に参加してくれた（くれる）	75	2.40	1.59	75	3.49	0.63	-7.36	75	2.09	1.60	75	3.13	1.25	-7.57
（7）家の中で一緒に遊んだ（遊ぶ）	73	2.05	1.52	73	2.23	1.74	-1.24	74	1.61	0.84	74	1.95	1.37	-3.00**
（8）一緒に外出した（する）	75	2.85	1.21	75	3.68	1.09	-5.91	74	2.58	1.21	74	3.51	1.08	-6.57
（9）会話をした（する）	75	2.96	0.80	75	3.80	0.22	-7.48	74	2.85	0.92	74	3.74	0.25	-7.67
（10）一緒にテレビを観た（観る）	75	3.01	0.96	75	3.48	0.66	-4.26	74	2.69	1.09	74	3.26	0.93	-4.98

項　目	現在						
	父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）一緒に朝食を食べた（食べている）	71	1.45	0.94	71	1.70	1.41	-3.29**
（2）一緒に夕食を食べた（食べている）	71	2.24	1.73	71	2.75	2.02	-4.28
（3）一緒にお風呂に入った（入っている）	72	1.00	0.00	72	1.14	0.37	-1.93
（4）絵本や本の読み聞かせをしてもらった	-	-	-	-	-	-	-
（5）寝かしつけをしてもらった	-	-	-	-	-	-	-
（6）学校行事に参加してくれた（くれる）	74	1.69	1.20	74	2.39	1.83	-5.40
（7）家の中で一緒に遊んだ（遊ぶ）	74	1.49	0.77	74	1.78	1.38	-2.48*
（8）一緒に外出した（する）	74	2.35	1.27	74	3.36	1.30	-6.72
（9）会話をした（する）	73	2.82	0.95	73	3.63	0.46	-6.50
（10）一緒にテレビを観た（観る）	73	2.59	1.19	73	3.07	1.04	-4.34

* : p<0.05，** : p<0.01，*** : p<0.001

高学年，中学校，現在において，父親よりも母親の関わり得点が有意に高かった。また，「一緒に夕食を食べた（食べている）」という項目では，小学校高学年と中学校において，父親よりも母親の関わり得点が有意に高かった。このことから，母親は父親よりも子どもと一緒に食事を摂っていたことや，父親は，朝食よりも夕食を子どもと一緒に摂っていたことが明らかとなった。

3−3　青年期の娘が認識している親からの愛情

（1）日常の関わりから見た愛情認識

日常的な関わりの中で，子どもが親からの愛情を感じやすいと考えられる行動（例えば「愛している」と言葉をかける，身体を抱きしめるなど）について，幼児期から現在までの頻度を尋ねた。調査で得られた回答を５点満点として得点化し，愛情認識得点とした。４件法によって回答を求めた項目については５点満点に換算した。父親と母親の愛情認識得点の時期別の平均点を表４に示す。関わり得点と同様，愛情認識得点についても，幼児期〜小学校低学年の得点が最も高く，子どもの年齢が上がるにつれて得点は低くなった。

表４　時期別にみた父母の愛情認識得点の平均点（点）

項　目	父親 幼児期〜小学校低学年 (SD)	父親 小学校高学年 (SD)	父親 中学校 (SD)	父親 高校 (SD)	父親 現在 (SD)	母親 幼児期〜小学校低学年 (SD)	母親 小学校高学年 (SD)	母親 中学校 (SD)	母親 高校 (SD)	母親 現在 (SD)
（1） 「愛しているよ」，「大事だよ」などと言ってくれた（くれる）	2.99 (1.42)	2.70 (1.35)	2.33 (1.19)	2.19 (1.16)	2.18 (1.10)	3.56 (1.40)	3.32 (1.39)	3.02 (1.39)	2.95 (1.43)	2.81 (1.40)
（2） 抱きしめたり，頭をなでたりしてくれた（くれる）	3.83 (1.32)	3.20 (1.44)	2.15 (1.14)	1.87 (0.99)	1.81 (1.04)	4.27 (1.12)	3.86 (1.33)	3.06 (1.52)	2.79 (1.44)	2.72 (1.44)
（3） 欲しいものを買ってくれたり，旅行に連れて行ってくれたりなどお金をかけてくれた（くれる）	4.21 (1.11)	4.01 (1.21)	3.64 (1.29)	3.36 (1.41)	3.13 (1.46)	4.38 (0.95)	4.21 (0.97)	4.07 (0.96)	3.90 (1.12)	3.80 (1.25)
（4）① 自分の考え方を尊重してくれている	- -	- -	- -	- -	3.97 (1.11)	- -	- -	- -	- -	4.34 (0.86)
② 自分を信頼してくれている	- -	- -	- -	- -	4.08 (1.10)	- -	- -	- -	- -	4.30 (0.90)
③ いざというときには何をおいても自分を助けてくれようとすると思う	- -	- -	- -	- -	4.20 (1.10)	- -	- -	- -	- -	4.45 (0.92)
④ 親に叱られたとき，自分のために叱ってくれていると思う	- -	- -	- -	- -	3.96 (1.19)	- -	- -	- -	- -	4.22 (0.96)

（2）父親・母親別に見た愛情認識

親から受けた愛情の認識が，父親と母親で異なるのかを調べるため，質問３の調査項目ごとに父親と母親のいずれにおいても欠損のない回答者のデータを抽出し，対応のある t 検定により検証を行った。その結果を表５に示す。多くの項目で，母親の愛情認識得点は父親よりも高かった。特に，「愛しているよ」などの言葉かけや，抱きしめるなどの身体接触は，一貫して父親よりも母親から受けていたと認識していた。回答者が中学生になってからは，父親よりも母親から欲しい物を買ってもらったりするなど，お金をかけてもらったと認識していた。また，母親は父親よりも，自分の考え方を尊重してくれたり，自分を信頼してくれていると認識していた。つまり，子どもが低年齢の時期において，母親は「愛しているよ」という言葉かけや身体を抱きしめるなどのような直接的な愛情表出を行い，子どもの年齢が上がるに従って，間接的な愛情表出を行っていくのではないかと示唆され

表５　愛情認識得点の父母比較

項　目	幼児期～小学校低学年							小学校高学年						
	父親			母親				父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）「愛しているよ」「大事だよ」などと言ってくれた（くれる）	77	2.39	1.29	77	2.83	1.27	-4.01***	75	2.17	1.17	75	2.64	1.21	-4.79***
（2）抱きしめたり，頭をなでたりしてくれた（くれる）	76	3.08	1.11	76	3.38	0.83	-3.92***	75	2.59	1.33	75	3.07	1.12	-4.08***
（3）欲しいものを買ってくれたり，旅行に連れて行ってくれたりなどお金をかけてくれた（くれる）	78	3.33	0.85	78	3.49	0.59	-1.59	77	3.21	0.96	77	3.35	0.63	-1.52
（4）① 自分の考え方を尊重してくれている	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
② 自分を信頼してくれている	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
③ いざというときには何をおいても自分を助けてくれようとすると思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
④ 親に叱られたとき，自分のために叱ってくれていると思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

項　目	中学校							高校						
	父親			母親				父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）「愛しているよ」「大事だよ」などと言ってくれた（くれる）	74	1.88	0.90	74	2.39	1.20	-4.94***	75	1.73	0.85	75	2.31	1.30	-5.17***
（2）抱きしめたり，頭をなでたりしてくれた（くれる）	76	1.72	0.84	76	2.41	1.47	-5.21***	73	1.48	0.61	73	2.19	1.35	-5.30***
（3）欲しいものを買ってくれたり，旅行に連れて行ってくれたりなどお金をかけてくれた（くれる）	77	2.91	1.08	77	3.26	0.59	-2.87**	76	2.68	1.29	76	3.13	0.76	-3.54***
（4）① 自分の考え方を尊重してくれている	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
② 自分を信頼してくれている	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
③ いざというときには何をおいても自分を助けてくれようとすると思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
④ 親に叱られたとき，自分のために叱ってくれていると思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

項　目	現在						
	父親			母親			
	n	M	SD	n	M	SD	t値
（1）「愛しているよ」「大事だよ」などと言ってくれた（くれる）	76	1.71	0.72	76	2.21	1.21	-4.54***
（2）抱きしめたり，頭をなでたりしてくれた（くれる）	76	1.42	0.62	76	2.13	1.29	-5.37***
（3）欲しいものを買ってくれたり，旅行に連れて行ってくれたりなどお金をかけてくれた（くれる）	75	2.49	1.36	75	3.05	0.92	-4.12***
（4）① 自分の考え方を尊重してくれている	79	3.97	1.23	79	4.32	0.76	-3.04**
② 自分を信頼してくれている	79	4.08	1.20	79	4.29	0.82	-2.12*
③ いざというときには何をおいても自分を助けてくれようとすると思う	79	4.20	1.21	79	4.43	0.86	-1.85
④ 親に叱られたとき，自分のために叱ってくれていると思う	79	3.96	1.42	79	4.22	0.91	-2.11*

* : p<0.05，** : p<0.01，*** : p<0.001

た。いずれにしても，青年期の娘は，これまで父親よりも母親から様々な形で愛情を受けてきた（受けている）と認識していることが明らかとなった。

（３）青年期の娘が実際に認識している親からの愛情

父親または母親が，自分のことを大事に想っている気持ちを現在までどのように表してくれてきた（表してくれている）と感じているかについて，当てはまるものを３つまで選択してもらった。回答者の割合を図１に示す。父親においては，「意見や考え方を尊重してくれる」ことによって愛情を感じてきた（感じている）回答者の割合が最も高く，５割に近かった。これは，母親についても選択率が高かった。次いで，「欲しいものを買ってくれるなどお金をかけてくれる」こと，「いざというときには何をおいても助けてくれようとする」の割合が高かった。一方，母親においては，「相談に乗ってくれたり，アドバイスをくれたりする」ことで愛情を感じてきた（感じている）と回答した割合が最も高かった。

父親についての回答と母親についての回答を比較するために，$\chi 2$ 検定を行ったところ，「相談に乗ってくれたり，アドバイスをくれたりする」と「いつも真剣に話を聞いてくれる」ことによって母親から愛情を感じてきた（感じている）回答者は，父親よりも多かった。一方，「いざというときには何をおいても助けてくれようとする」と「欲しいものを買ってくれるなどお金をかけてくれる」ことによって父親から愛情を感じてきた（感じている）回答者は，母親よりも多かった。以上のことから，青年期の娘は，父親の自分に対する愛情表出の仕方と母親の自分に対する愛情表出の仕方は異なっていると認識していたことが明らかとなった。

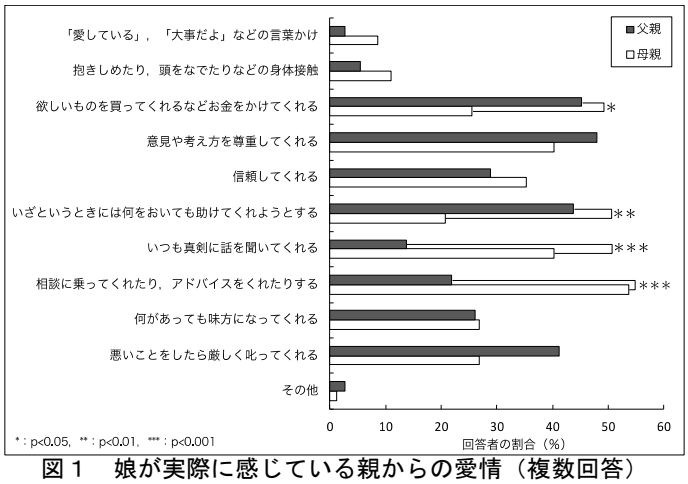

図１　娘が実際に感じている親からの愛情（複数回答）

３−４　関わり得点と愛情認識得点の関連

（１）父母別に見た関わり得点と愛情認識得点の関連

関わり得点と愛情認識得点の関連を見るために，父親と母親のいずれにおいても欠損がないデータを抽出（n=57）し，父母別に相関分析を行った。その結果，母親の関わり得点と愛情認識得点との間に正の相関が認められた（$r=0.466, p<0.001$）。父親の関わり得点と愛情認識得点の間には有意な相関は認められなかった。

（２）時期別に見た関わり得点と愛情認識得点の関連

幼児期から現在までの時期によって，関わり得点と愛情認識得点に関連があるかを検証

するため，時期ごとの相関分析を行った。その結果，母親は，中学校と高校の時期において，関わり得点と愛情認識得点との間に正の相関が認められた（中学校：$r=0.26, p<0.05$, 高校：$r=0.36, p<0.01$）。

３−５　女子短大生の結婚，出産に対する意識—第 15 回出生動向基本調査との比較

（１）結婚の意思

「いずれ結婚するつもり」と回答した割合は 96.4%であり，これは全国調査（85.7%）よりも高かった。また，「一生結婚するつもりはない」と回答したものはいなかった。さらに，結婚する意思のあった回答者のうち，「ある程度の年齢になるまでには結婚するつもり」であると考えている割合は 57.1%（全国調査：59.3%），「理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくても構わない」と考えている割合は 36.9%（全国調査：39.2%）であった。

（２）結婚することの利点

結婚することに利点があると感じている回答者は 86.9%，利点はないと感じている回答者は 9.5%であった。全国調査では，利点があると感じている女性未婚者は 77.8%，利点はないと感じている女性未婚者は 20.7%であったことから，本調査における回答者は，全国調査よりも結婚に対して利点を感じているものの割合が高かった。このことが，（１）において，「いずれ結婚するつもりである」と考えている回答者が多かったことと関連していると考えられた。

（３）結婚の具体的な利点

結婚の具体的な利点を図２に示す。結婚の利点として，「自分の子どもや家族をもてる」と回答したものが最も多く，これは，全国調査と同じ結果であった。次いで多かったのは「現在愛情を感じている人と暮らせる」であった。結婚の具体的な利点についても，全国調査と同様の結果であった。

（４）希望する子どもの数

結婚の意思がある回答者が希望する子どもの数の平均値は 2.43 であり，全国調査の 10 代未婚女性の 2.05 や，20 代未婚女性の 2.09 よりも高かった。これは，回答者自身のきょうだい数が多いため，将来自分も子どもを複数欲しいと考えたのではないかと推察された。

また，希望子ども数が２人と回答した割合が最も高く（54.8%），次いで３人と回答した割合が高かった（35.7%）が，これは全国調査と同じ結果であった。

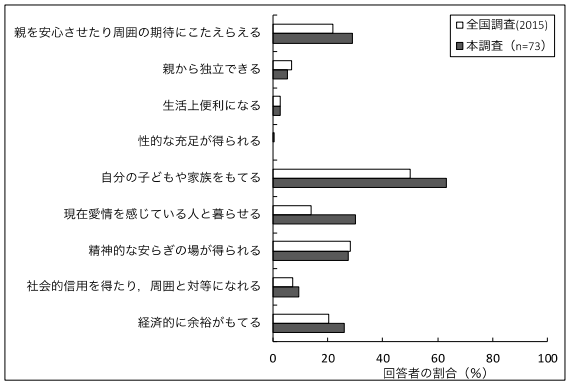

図２　各「結婚の利点」を選択した割合（２つ選択）

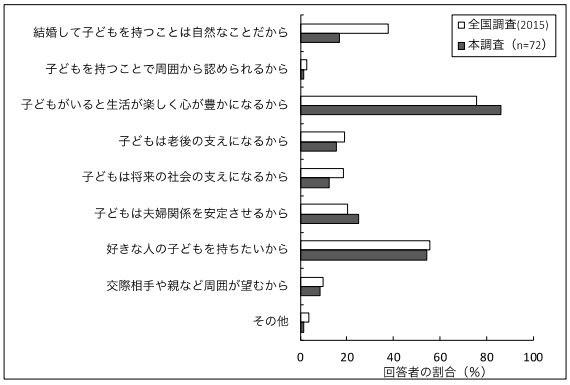

図３　子どもを持ちたい理由（複数回答）

（５）子どもを持ちたいと考える理由

子どもを持ちたいと考える理由を尋ねた結果を図３に示す。「子どもがいると生活が楽しく心が豊かになるから」と回答した割合が最も高かった。次いで,「好きな人の子どもを持ちたいから」の割合が高く，全国調査における結果と同じであった。

（６）希望する結婚年齢と結婚相手との年齢差

回答者が結婚したいと思う年齢の平均は 24.1 歳であった。全国調査における 18～19 歳の未婚女性の平均希望結婚年齢は 26.1 歳, 20～24 歳の未婚女性では 26.8 歳であったことから，本調査の回答者の平均希望結婚年齢は若い傾向があった。これは，本調査対象者が短大生であったことが影響していると考えられた。また，結婚相手との年齢差についての希望をみると,「１～２歳年上」が最も多く（46.8%），次いで　同じ歳（32.9%）が多かった。これについては，全国調査と同様の結果であった。

（７）結婚相手に求める条件

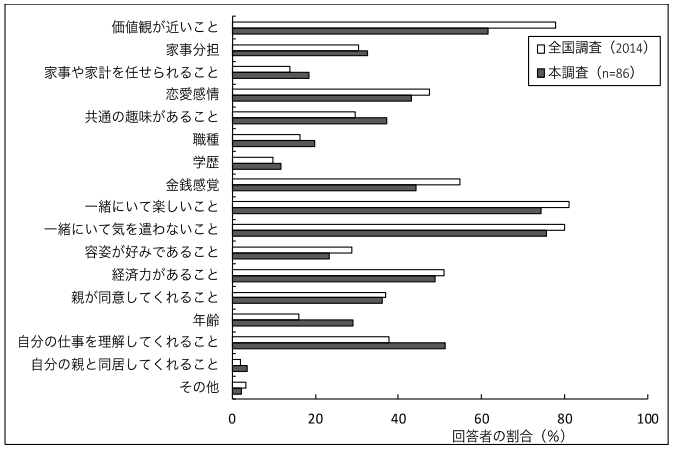

図４　結婚相手に求める条件（複数回答）

回答者が結婚相手に求める条件を図４に示す。本調査項目については，内閣府（2014a）の全国調査と比較する。結婚相手に求める条件の中で, 回答者が多かったのは,「一緒にいて気を遣わないこと」（12.3%）と「一緒にいて楽しいこと」（12.1%）であり，全国調査と同じであった。全体的にみても, 全国調査における 20 代未婚女性の結果と同じ傾向であった。

（８）子どもとのふれあい経験や周囲の結婚に対する評価

「赤ちゃんや小さい子どもとふれあう機会がよくあった（よくある)」という質問に対して,「あてはまる・どちらかというとあてはまる（以下，あてはまる)」と回答した割合は 67.9%,「あてはまらない・どちらかというとあてはまらない（以下，あてはまらない)」と回答した割合は 32.1%であった。全国調査では,「あてはまる」は 46.7%,「あてはまらない」は 50.8%であったことから，本調査における回答者は，赤ちゃんや小さい子どもとふれあう機会が多かった（多い）ことがわかった。

また,「両親のような夫婦関係をうらやましく思う」という質問に対して，本調査において「あてはまる」と回答した割合は 45.1%，全国調査では 51.1%であり，いずれも約５割のものが両親のような夫婦関係をうらやましく思っていた。

さらに,「結婚しているまわりの友人をみると, 幸せそうだと思う」という質問に対して，本調査において「あてはまる」と回答した割合は 72.0%，全国調査では 49.8%であり，本調査の回答者のほうが高い割合であった。

子どもとふれあう機会が多かった（多い）未婚者や，両親や友人の結婚に肯定的な未婚

者は結婚意欲が高い（厚生労働省，2015）ことから，本調査においても，女子短大生の子どもとのふれあい経験の豊富さや両親や友人の結婚への肯定感情が，彼女たちの結婚意識の高さに現れていると考えられた。

３−６　愛情認識得点と結婚・出産への意識との関連

愛情認識得点が高かった学生と低かった学生の結婚や出産に対する意識に違いがあるかを検証するため，父親と母親のいずれにおいても愛情認識得点が平均点よりも高い回答者を高群，平均点よりも低い回答者を低群とし，質問項目ごとに$\chi 2$検定を行った。

（１）愛情認識得点の高低と両親の夫婦関係に対する意識

「両親のような夫婦関係をうらやましく思う」という質問項目について,「あてはまる」,「どちらかというとあてはまる」と回答した回答者の割合を高低群別に図５に示す。高群は低群よりも，両親のような夫婦関係をうらやましく思っていたことが明らかとなった。

（２）愛情認識得点の高低と子どもを持ちたい理由

愛情認識得点の高低群の子どもを持ちたい理由を図６に示す。高低群のいずれにおいても「子どもがいると生活が楽しく心が豊かになるから」の割合が最も高く，次いで,「好きな人の子どもを持ちたいから」の選択率が高かったが,高群は低群よりも有意に高かった。

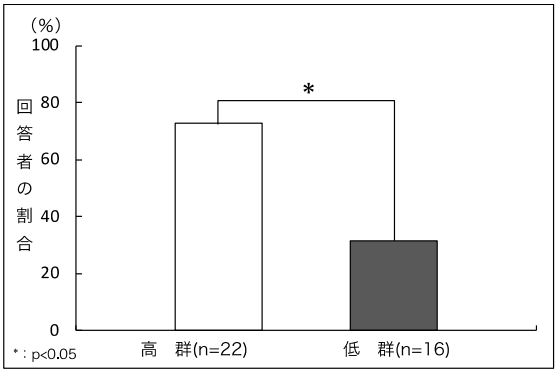

図５ 愛情認識得点の高低別にみた「両親夫婦関係をうらやましく思う」と回答した割合

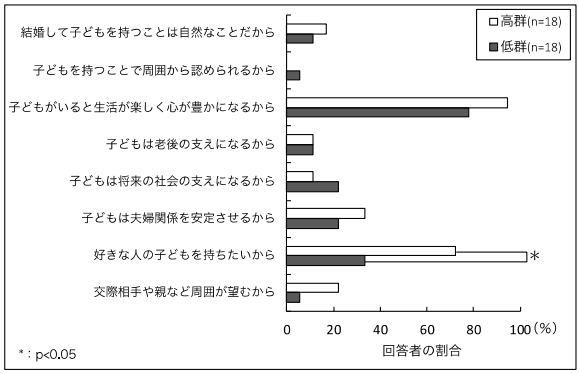

図６ 愛情認識得点の高低別にみた子どもを持ちたい理由（複数回答）

（３）愛情認識得点の高低と結婚相手の条件

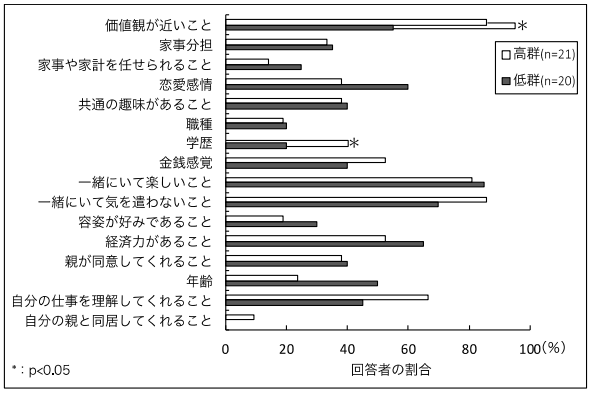

図７　愛情認識得点の高低別にみた結婚相手の条件（複数回答）

愛情認識得点の高低群の結婚相手の条件を図７に示す。高低群のいずれにおいても,「一緒にいて楽しいこと」,「一緒にいて気を遣わないこと」と回答した割合が高かった。高群は「価値観が近いこと」と回答した割合も高く，低群との間に有意な差が認められた。一方，低群は「経済力があること」と回答した割合が３番目に高く,「学歴」は高群よりも有意に高かった。

４．考察

本研究は，女子短大生が現在まで親とどのように関わり，親からの愛情をどう認識しているかを明らかにし，そのことが，女子短大生の結婚や出産に対する考え方と関連があるかについて検証した。

女子短大生と親との日常的な関わりは，学生が幼児期～小学校低学年といった低年齢の時期に最も多く，年齢が上がるにつれて少なくなった。子どもの発達に伴って，親子の関わりが量的に減少することは当然のことだが，学生とその母親との日常的な会話は，他の関わりに比べると極めて頻度が高かった。また，学生は，幼児期から現在まで父親よりも母親と日常的に関わることが多かったと認識していた。

また，日常的な関わりの中で，子どもが親からの愛情を感じやすいと考えられる行動（例えば「愛している」と言葉をかける，身体を抱きしめるなど）について，その頻度を尋ねたところ，娘は父親よりも母親からそのような行動を受けてきたと認識していた。特に幼少期において，母親は父親よりも「愛している」などの言葉かけや，身体を抱きしめるなどの関わりが多く，子どもの年齢が上がってくると，子どもの考え方を尊重したり，子どもを信頼するといった関わりが多かった。さらに，これらの行動を多く表出させた母親は，日常的な関わり頻度も高い母親であった。これらのことから，本研究においても母娘関係の距離の近さが確認された（柏木, 1998；宮本, 2004；水本, 2018）。

両親が自分のことを大事に想う気持ちをどのように表してきてくれたか（表してくれているか）と感じているか尋ねたところ，「意見や考え方を尊重してくれる」ことで両親からの愛情を感じていた学生が多かった。それに加え，父親からは「お金をかけてくれる」ことによって，母親からは「相談に乗ってくれたり，アドバイスをくれたりする」，「いつも真剣に話を聞いてくれる」ことによって愛情を感じていた。先にも述べたとおり，母と娘は日常的に頻繁に会話をしており，母親が実際に行ってきた行動と，娘が母親からの愛情表出として捉えている行動とが一致していた。しかし，父親からの愛情表出として娘が認識していた「お金をかけてくれる」という行動は，実際には父親よりも母親が頻繁に行っていた行動であり（表５），父親が実際に行ってきた行動と，娘が父親からの愛情表出として捉えている行動とにずれがあった。これは，多くの学生の父親がフルタイム職員，母親が無職やパート･アルバイトといった就業状況であったことが関係していると考えられる。そのような就業状況の場合，母親と子どもとの関わりは，日常の多くの場面で父親よりも多くなることが推察される。加えて，娘は，フルタイムで働く父親を一家の主要な働き手であると認識するようになり，これらのことが，実際には母親にしてもらってきたと認識していた「お金をかけてくれる」という行動を，父親からの愛情表出として捉えてしまったのではないだろうか。

親からの愛情をどのように認識しているかと，女子短大生の結婚や出産に対する考え方との関連をみてみると，親から強い愛情を感じている学生（高群）もそうではない学生（低群）も，「一緒にいて楽しいこと」，「一緒にいて気を遣わないこと」と回答したものが最も多かった。しかし，高群は低群よりも，結婚相手の条件として「価値観が近いこと」の選択率も高かった。その一方で，低群は高群よりも「学歴」や「経済力があること」と回答したものが多かった。さらに，高群は，自分の子どもを持ちたい理由として，「好きな人の子どもが持ちたいから」と回答したものが低群よりも多かった。このことか

ら，親から強い愛情を感じている学生は，「価値観が近いこと」や「好きな人の子どもが持ちたい」などの主観的な指標を重視しており，そうではない学生は，「学歴」や「経済力」といった客観的な指標を重視していることが明らかとなった。本研究において，「親から強い愛情を感じている」とは，親から「愛しているよ」，「大事だよ」などという言葉をかけてもらったり，身体を強く抱きしめてもらったり，意見や考えを尊重してもらったりしたことがあり，いざというときには親は必ず助けてくれると信じていることを言う。自分の親に対してこのように認識している学生が，結婚や出産に対して主観的な指標を重視していたのは，これらの学生が主観的な指標で物事を判断できるということではないだろうか。「親への信頼」は子どもの自己肯定感に影響を及ぼす（郭・田中・任・史，2018）ことや，「親から理解されている」，「親から愛されている」という感覚を持っている子どもは自己肯定感が高い（内閣府, 2014b）ことが報告されている。つまり，親が自分を愛し，自分の考えを尊重し，信頼しているという実感があると，子どもも親を信頼し，自分自身を信じることができるのではないだろうか。そのため，親からの愛情をあまり感じていない学生（低群）は，結婚や出産に対して「学歴」や「経済力」といった客観的指標を重視しているのではないかと考えられた。さらに，親から愛されていると感じている学生は，子どもを持ちたい理由として極めて客観的な指標といえる「子どもを持つことで周囲から認められるから」という選択肢を選択しなかった（図６）。これらのことから，本調査では直接的に学生の自己評価の測定は行わなかったものの，親からの愛情を認識していることは，子どもの自己肯定感を高めることが示唆された。そして，この自己肯定感の高さが，結婚や出産を自らの基準で主体的に考えることに繋がったと考えられた。

以上のことから，親から受けた愛情の認識と，女子短大生の結婚や出産に対する意識について，親からの愛情を強く認識していた学生は，自己肯定感を高め，結婚や出産を主体的に考えていたのに対し，そうではない学生は，客観的な指標によって結婚や出産を考えていたことが明らかとなった。

引用文献

権田あずさ・今川真治(2012). 幼稚園３歳児の日常的な母子のかかわりと園生活の進行に伴う母親の気持ちの変化. *日本家政学会誌*, 63(4), 193-203.

今川真治(2017). 恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連. *広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部*, 66, 213-222.

石野陽子・清水寛之(2010). 青年期の結婚観と子育て観に関する予備的研究. *島根大学教育学紀要*, 43, 87-95.

岩月謙司(2003). *娘は男親のどこを見ているか*. 東京：講談社.

郭芳・田中弘美・任セア・史邁(2018). 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究―京都子ども調査をもとに―. *評論・社会科学＝Social science review*, 126, 15-32.

柏木惠子(編)(1998). *結婚・家族の心理学―家族の発達・個人の発達*. 京都：ミネルヴァ書房.

小平英志・末盛慶・鈴木佳代(2017). シングルマザーのワーク・ファミリー・コンフリクトが中高生の家族イメージ，結婚観に及ぼす影響―ペア調査によるふたり親世帯との比較を通して. *パーソナリティ研究*, 26(2), 170-172.

厚生労働省(2015). 結婚と出産に関する全国調査. *第 15 回出生動向基本調査*.

宮本みち子(2004). *ポスト青年期と親子戦略―大人になる意味と形の変容*. 東京：勁草書房.

水本深喜(2018). 青年期後期の子と親との関係―精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差―. *教育心理学研究*, 66, 111-126.

内閣府(2014a). *結婚・家族形成に関する意識調査*.

内閣府(2014b). *我が国と諸外国の若者の意識に関する調査*.

小野寺敦子(1984). 娘からみた父親の魅力. *心理学研究*, 55, 289-295.

斉藤嘉孝(2012). 定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与えうる影響～大学生を対象とした量的調査の結果より. *法政大学キャリアデザイン学部紀要*, 9, 369-379.

下坂剛(2018). 大学生における親の夫婦関係の認知が結婚観・離婚観に及ぼす影響―恋経験の媒介効果と性役割観によるマルチレベル分析. *日本青年心理学会大会発表論文集*, 68-69.

白井利明(2018). クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か―ダイナミック・システムズ・アプローチとしての生活空間論―. *大阪教育大学紀要 総合教育科学*, 66, 75-94.

総務省(2015). *平成 27 年国勢調査*.

綿引伴子・横道綾乃(1998). 大学生の家族観. *金沢大学教育学部紀要 教育科学編,* 47, 255-262.